

M I F F の変貌と方向 ①

使用材の変化と製品多様化

ゴムの木から工業用素材、外材へ

マレーシア国際家具展期を約5年ほどの引き延ばす現象が起きてきたことも業者から指摘された。マレーシア・テンバール協会のアブダル・ラヒム会長のインタビューの続きを紹介しよう。

——家具産業と住宅建材ではどのような使い分けが木材分野で行われているか。

「樹種としては全体でかなりの数があるが、住宅と家具では約2500樹種、うち250種類ほどが家具産業に活用され

る。マレーシア・テンバール協会のウェブサイトに詳細が出ているのを見てほしい。家具、装飾材、フローリング、壁材など建材は一般的に硬木材を使う。耐久性が求められるからだ。主にサラワク州の木材が屋根材を始め建築用に使用される。1番目にChengal、2番目はBalau、3番目Belitau材(いずれもバンキライ樹種・フタバガキ科)などがあげられる」。

——マレーシアの国産材と外国産材の費用比率は。

「10~15年前からマレーシアの森林保護のため使用材を輸入するようになった。国はニュージラド、アメリカ、オーストラリア、フランス、カナダ、インドネシア、パプアニューギニアなど。主材

はマレーシア材でサブとして輸入材を使用してきた。70から80%はラバーウッドで残りの20から30%が外材だ。家具は完成品としての輸入が中国が全体の54%を占め、次いで日本8%、インドネシアの順になっている」。

——日本市場との関わりはの現況と期待は。

「日本にはマレーシアの家具をもっと輸入して欲しい。永い友好関係にあるので、日本が輸入する合法木材、製品を我々は理解している。アベノミクスで経済も良くなっていると思うので、20年の五輪も控えて我々からの輸入増を期待する」。(続く 長島)



MTCのアースでラヒム会長のと筆者



木製ダイニングセットのアース